

味を表すことば

— 「おいしい、うまい、まずい」の多義性と構文の特徴—

中島 晶子*

1. はじめに

本稿では、味の良し悪しの評価を表す基本語「おいしい」「うまい」「まずい」を取り上げ、その多義性と構文の特徴を考察する。これまでの知見をふまえた上で、特に各語がそれぞれの意味に応じて共起する語、構文タイプ、頻度を見ていく。

用例検索をするにあたり、筑波大学、国立国語研究所、Lago 言語研究所が構築したコーパス検索ツール『NINJAL-LWP for TWC』(以下、NLT)を利用した(<http://corpus.tsukuba.ac.jp>)。特に記載のないものは作例である。

2. 先行研究

まずこれらの語のうち「おいしい」と「うまい」は類義語であり、それぞれ「まずい」と反義関係にある。「おいしい」と「うまい」の違いとして、まず、「おいしい」が男女ともに使う言葉であるのに対し、「まずい」が主に男性が使うという位相の差が挙げられる(高崎 2012 など)。そして、「おいしい」がもっぱら味について使われるのに対し、「うまい」「まずい」は味以外の意味でも使われ広い用法をもつことが挙げられる。主な先行研究として挙げられる武藤(2002)では、「各語の複数の意味の相互関係は、比喩により動機付けられる」とし、各語の多義構造をまとめている。各語の意味がどのように拡張していったかに焦点があるため、現在の使用のなかでどの意味がより多く使われるかなどは取り上げられていない。また、分析対象

の例文はほとんどが連体修飾用法のものであるが、実際には同じ語でも述語用法や連用修飾用法では使われる意味の傾向や頻度が異なるため、その点を取り上げるのも有意義であると考えられる。

構文については、形容詞が文に現れる位置によって区別される、連体修飾用法、述語用法(叙述用法)、連用修飾用法(副詞用法)に分け、それぞれでどのような意味が見られるかを考察する。連用修飾用法については、行為連鎖(Cf. Langacker 1991、影山 2009)の観点から分析をする。行為連鎖とは、事象をいくつかの局面から捉えた見方で、品詞によって具現化されるものが異なる点に注目できる。以下の例では事象を3つの局面に分けられる。

(1)パンを焼く

<行為> → <変化> → <状態>

生地加熱 火が入る パンのできあがり

このように、動詞は上の3つの局面のうちの1つ、2つ、あるいはすべてを表す品詞であり、形容詞・形容動詞は<状態>に特化した品詞であるが、これに対し副詞は文の必須補語ではなく、<行為>の内容、あるいは結果の<状態>を修飾する(影山 2009)。形容詞の連用修飾用法も以下のように特化される局面が異なる(後述)。

(2)カレーをおいしく作る。(＜結果状態＞を修飾)

(3)カレーをおいしく食べる。(＜行為＞を修飾)

次節からは、武藤(2002)の多義性記述を紹介した後、それをもとに各語のふるまいを観察する。

3. 「おいしい」の意味と構文の特徴

* パリ・ディドロ大学

「おいしい」は女房言葉の「いしい」に接頭辞「お」の付いた語で、もともと女性言葉であり、現在も女性は、ぞんざいな言い方になる類義語「うまい」よりも「おいしい」を使う傾向がはっきりしている。その一方で、くだけた場面で「うまい」を使う男性も、丁寧に言う場面では「おいしい」を使っており、「おいしい」の使用に現在では性差はあまり見られなくなっている(高崎 2012)。

武藤(2002)は「おいしい」の多義を以下のようにまとめている(書き方を一部変更)。

- ①(基本義)飲食物の味が良い(と感じられ好ましく思う)さま。(Ex.おいしいお菓子)
- ②①のメトニミーから食欲をかき立てるような嗅覚的・視覚的の属性あるいは①に直接関わる(話・文章の)内容。(Ex.おいしい匂い/色/レシピ)
- ③①のメトニミーから期待感・好ましさのあまり顔をほころばせたさま。(Ex.おいしい顔)
- ④①のメタファーからある事物が格別の価値を持つことから深い満足感が得られ望ましいと感じるさま。(Ex.おいしい生活、体においしい、おいしいボール/バイト/話)

基本義①は飲食物を対象に味の良さを表し、それがメトニミーによって対象が飲食物からそれと関連のあるものに転用され、飲食物の匂いや外観(②)、あるいは、おいしいものを食べた時に出る表情など(③)を表す。また、メタファーによって①から④に拡張し、好ましいという性質を味覚以外の領域の事物に適用している。

これらの意味が表れる文を見ると、構文タイプや共起する語には違いが見られる。まず、連体修飾用法と述語用法から取り上げる。NLTを見ると、基本義①は(4)(5)のように連体修飾部でも述部でも使われ、双方ともに使用頻度は高い。以下の共起語は頻度順である。

- (4)おいしい{水/御飯/料理/食事}
- (5){料理/食事/御飯/水}がおいしい。

これに対し用法②③に当たる(6)(7)では、連体修

飾は問題ないが、述部では不自然になる。

- (6)おいしい{色/匂い/レシピ/顔}
 - (7)この{?色/?匂い/?レシピ/*顔}はおいしい。
- 用法④では、(8)の慣用表現の「おいしい思いをする」以外は述部に使っても非文とならない。
- (8)おいしい{話/思い/仕事/生活/情報}
 - (9)この{話/*思い/仕事/生活/情報}はおいしい。

ただし NLT では(以下、カッコ内の数字は出現数)、「は/がおいしい」パターン(15885)のうち、用法④で最も多く主語に現れるのが「報酬」(6)で、他の語も多くなく、用法④の述語用法は一般的ではないと言える。これが「おいしい+名詞」パターン(36950)になると、用法④はより高頻度で見られ、共起語の種類も「話(328)、思い(138)、仕事(57)、生活(33)など」など多くなる。

さて、用法④は次節で述べる「うまい」の用法④と類義関係にあるが、両者では含意されるものが異なる。「おいしい」の場合、基本義にある快い(味覚)という意味に、その快さを得る手段として「大変な思いをしない」つまり「簡単に」という属性が付加される。簡単に望ましい結果が得られることから、「安易すぎる」「裏がある」という否定的な意味合い、あるいは、「お得」という肯定的な意味合いが出てくる。これは共起する語によって個々の解釈に傾向の違いが出てくる。用法④で最も頻度が高かった「おいしい話」では 328 例のうち、(10)のように「裏がある」「だます」などの表現が共起するものが 199 例ある。このほか、(11)のように「おいしい話はあるわけがない」のように否定文に使われている例も少なくない。

- (10)おいしい話には裏がある。儲け話にはご注意ください！
(http://www.city.himeji.lg.jp/s30/2212110/_9895/_9985.html)

- (11)失業してハローワークに行っても、アルバイト情報誌、就職サイトを探しても、おいしい仕事なんて一つも載ってないと思います。

(<http://www1.yel.m-net.ne.jp/mk-kobu/column.html>)

これに対し「おいしい情報」は、52例のうちの34例が「おいしいものについての情報」というメトニミー用法で、「役立つ情報」「楽しい情報」という肯定的なニュアンスがあり、残る18例は「得をするための情報」で、そのほとんどが積極的に利用すべき情報という文脈で使われている。

(12)温泉宿の特典や、おいしい情報が届きます。

(http://www.jiyujin.co.jp/onsen/request_jiyujin0909.html)

また、「おいしい仕事」は57例あり、誰にでもでき、よい収入を得られる仕事のカテゴリーとして言うのが一般的で、そういうものはないという文脈での使用も少なくないが、批判的な意味が表現自体にあるわけではなく、よい意味の例もある。

(13)[歯科助手は]朝は早いけど、休憩時間はちゃんとあるし、連休もしっかりとれるおいしいシゴトだと思う。(http://www.froma.com/info/edit/oshigotoguide/3

01_112_186.html)

いずれの場合も用法④は、話者の評価が前面化されるよりは、「おいしい」というカテゴリー属性をもつものとして対象に言及する言い方が多い。

最後に連用修飾用法については、森田(1989)は(14)を結果修飾とし、森田(2008)では(15)を内容修飾的な(「連用形+思う/感じる」など)意味合いがこめられるとして挙げている。

(14)豆をおいしく煮る。(森田 1989)

(15)昼食は豪華な祭ずしを、おいしくいただいた。

(岩田幸子『笛吹天女』)(森田 2008)

これは動詞タイプによる違いだと考えられる。「煮る、作る」のような産出動詞では結果修飾になり、「食べる、飲む」のような飲食を表す動詞では内容修飾か行為の動作修飾になるわけである。行為連鎖内の修飾対象は以下のように表せるだろう。

<行為>→<変化>→<状態>

産出を表す動詞

(産出物の状態)

飲食を表す動詞 (行為の様態)

NLTでは飲食を表す動詞の方が多く見られる。

(16)何でも美味しく食べる。家庭円満の秘訣のようです。(http://www.wataclub.net/supplement/health/he_diet.html)

まず(16)では内容修飾のように「おいしいと思って」という解釈のほか「よく味わって」という行為の様態という解釈も可能である。連用修飾ではいずれの場合も、次節で述べる「うまく」と異なり、味のよさという意味しかもたない。

以上のように、「おいしい」は、味を表す基本義がもっともよく使われ、基本義では連体修飾と述語によく現れるが、転義では前者が多い。中心的意味の「(物質面での)快さ」は転義においても保持され、カテゴリー属性として表す傾向がある。連用修飾では、動詞によって行為の様態か結果状態を表す。

また、連体修飾か述語か、どの用法が高頻度かという点では以下のような傾向が見られた。「++」は高頻度のもの、「+」は比較的頻度が低いもの、「-」は非文か不自然なものに付けた。用法全体のなかで特に高頻度のものを「高」とした。

意味(共起する名詞)	連体	述語	頻度
①基本義(料理)	++	++	高
②メトニミー(匂い、顔)	++	-	
③メトニミー(顔)	++	-	
④メタファー(生活)	++	+	

4. 「うまい」の意味と構文の特徴

「おいしい」の類義語である「うまい」も味のよさを言うのが基本義であるが、「おいしい」とは位相差がある。高崎(2012)では、「うまい」は話し言葉のみならず書き言葉でももっぱら男性が使う点、そして、もとは女性語であり「うまい」と位相を異にする「おいしい」を男性が積極的に使うようになっている点が指摘されている。

武藤(2002)では「うまい」の多義を以下のように

にまとめている(書き方を一部変更)。

- ①(基本義)飲食物の味が良い(と感じられ好ましく思う)さま。(Ex.うまいお菓子)
- ②(①のシネクドキーから)技術(あるいはその結果としての出来映えの程度)が巧みで優れているさま。(Ex.うまい運転/字)
- ③(②のメタファーから)思考・態度が優れており適切であるさま。(Ex.うまい言葉/考え)
- ④(①のメタファーから)事態の進展(あるいはその結果)が思いのほか都合で望ましいさま。(Ex.うまい話、うまい汁(を吸う))

基本義①の飲食物の味のよさという意味がシネクドキー(下位概念から上位概念へ(あるいはその逆)の転用)によって、さまざまな分野における「技巧の高さ」を表し②の意味となり、これがさらにメタファーによって「その場に相応しい手際の良さといったような適切さ」(武藤 2002)を表す意味に転用され③になる。この「適切さ」は状況や目的を考慮しての巧みさであり、「おいしい」の意味には見られない。用法④は基本義がメタファーによって味覚以外の領域の事態に転用されたもので、「おいしい」の用法④と意味が近い。

位相差のある基本義①以外は女性も使うが、ややぞんざいな言い方に近くなるため、より丁寧に言うときは、②は「上手な(運転)」、③は「いい(言葉、考え)」、④は「いい(話)」「(うまい汁を吸う)は慣用表現)などになるだろう。

基本義①は「おいしい」と同じ記述になっているが、飛田良文・浅田秀子(1989:83)では、「本来飲食物と考えられていないものの味については、ふつう「うまい」は用いない」とし、不適当な例として「この水菓はなかなかうまい」を挙げ、例外として「山の新鮮な空気がうまい」という例を挙げている。この制約は「おいしい」ではゆるく、一般的ではないにせよ、次のような例もある。

- (17)美味しい薬も中にはありますが、そんな薬を [子どもに]飲ませるときでも、決して、美味しいから飲みなさいとはあまり言わないでく

ださい。(http://www.ikomaiin.com/hukuyakushidou.html)

また、森田(1989)は、「うまい」が舌先の美味感覚だけでなく、味わい深さ、こくのある滋味をも含めるのに対し、「おいしい」は味覚の良さをさす」と説明しており、このことから(17)の「美味しい」は「うまい」に置き換えられない。

構文を見ると、基本義①では連体修飾でも述語でも制約はなく、NLTによる構文パターンを見ても頻度が高い。以下の共起語は頻度順である。

(18)うまい{酒/魚/料理/水}

(19){酒/魚/料理/水}がうまい。

用法②も構文に制約はないが、実際の使用を見ると偏りが見られる。

(20)うまい{文章/絵}

(21){歌/絵/英語/連携}がうまい。

「うまい+名詞」パターンで頻度が最も高かったのは(20)の「文章(52)、絵(50)」で、「…が/はうまい」パターンでは(21)の「歌(376)、絵(281)、英語(184)、連携(182)」であった。後者の方が使用頻度も高く、共起語の種類も多い。

これが用法③になると、(22)(23)のように、連体修飾が普通で、述部では不自然になる。共起する名詞はものごとを進めたり考えを伝えたりする方法(言葉も含む)を表す語に限定されている。

(22)うまい{方法/言葉/使い方/説明}(を考慮する)

(23)?この{方法/言葉/使い方/説明}はうまい。

用法④は述部では使えず、連体修飾のみとなる。

(24)うまい{具合(に行く)/話/汁(を吸う)}

(25)この{*具合/!話/!汁}はうまい。

述語用法で「話がうまい」と言えば「話術が巧みだ」という意味になり、「汁がうまい」と言えば味の意味にしかならない。共起する名詞は用法③よりさらに限られる。「うまい具合に行く」や「うまい汁を吸う」は慣用的であり、これ以外で頻度が高い名詞は「話」かそれに類する語で、類義の「おいしい」の用法④と比べると非常に限定されてい

る。また、用例のほとんどが否定的な意味で使われ、「裏がある」「用心」といった表現が共起するか、「そんなものはないから騙されないように」という文脈で使われている。「おいしい話」では、「そんなものはない」という場合も、「現実は厳しい」といった含みで使われていたのに対し、「うまい話」では(26)のように、「実害を受ける恐れがある」という警告的な文脈での使用が目立つ。

(26)仕事を始める時は十分検討し「うまい話」に安易にのらないよう、少なくとも下記のこと
に注意して冷静に判断しましょう。(http://saitama-roudoukyoku.jsite.mhlw.go.jp/hourei_seido_tetsuzuki/chingin_kanairoudou/kanai4.html)

最後に連用形「うまく」を見ると、味のよさを言う意味はなくなり、巧みさを表す用法②の意味のみが適用される。「うまく」の類義語は「おしく」ではなく「上手に」となる。

(27)豆を{おいしく／うまく}煮る。(森田 1989)
森田(1989:195)によると、「うまい／まずい」はその出来ばえに接しての精神的満足感や詠嘆の気分の色が濃く、「じょうず／へた」は技巧面での優劣に対する判断の色合いが強いことから、前者は「主観的印象となり」、後者は「客観的判断となりやすい」という。

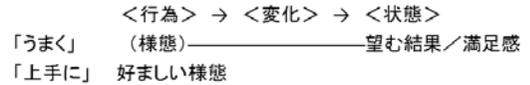
また、次の表現にも両者のニュアンスの違いが感じられる。

(28){うまく／上手に}言ってね。

(29){うまく／上手に}説得した。

「上手に」の場合、「相手の気を悪くしないような話し方で」といった行為の様態を表しているのに対し、「うまく」の場合はその行為をすることによって「(こちらが望む)よい結果を得る」といった目的あるいは結果を重視する含みがある。(28)の動詞「言う」はそれ自体で目的を含意するものではないが、「うまく」を使うとこの結果に焦点が置かれる。一方、(29)の「説得する」は相手に承諾させるという結果も意味に含み、「うまく」の意味は変わらないが、「上手に」では結果よりもその過

程において「相手の気を悪くしない」やり方に焦点がおかれている。同じ様態副詞としても「うまく」が行為の結果に焦点をおく点が特徴的であると言えるだろう。行為連鎖内の修飾対象は以下のように表せるだろう。



以上のように「うまい」は、基本義での使用はぞんざいな言い方になり男性が主に使うが、転義では位相差はなく、より広く使われる。基本義では連体修飾と述語によく現れるが、転義の用法②では述語用法、他の転義では連体修飾が多い。基本義でも転義でも中心的意味の「巧みさ」を、感心して言う言い方となるが、転義の用法④の使用例では、だまされることが含意される場合が多い。連用修飾では「巧みに」という意味になり、味は表さない。

また、連体修飾か述語か、どの用法が高頻度かという点では以下のような傾向が見られた。

意味(共起する名詞)	連体	述語	頻度
①基本義(酒)	++	++	高
②シネクドキー(絵)	+	++	高
③メタファー(方法)	+	-	
④メタファー(話)	+	-	

5. 「まずい」の意味と構文の特徴

「まずい」の多義構造は「うまい」と対応する面が多く、武藤(2002)では以下のようにまとめている(書き方を一部変更)。

- ①(基本義)飲食物の味が悪い(と感じられ不快に思う)さま。(Ex.まずいお菓子)
- ②(①のシネクドキーから)技術(あるいはその結果としての出来映えの程度)が低くて劣っているさま。(Ex.まずい運転/字)
- ③(②のメタファーから)見映えが悪いさま。(Ex.

まずい顔)

④①のメタファーから)事態の進展(あるいはその結果)が思いのほか不都合で望ましくないさま。(Ex.まずい思い(をする)、まずい結果)味の悪さを表す基本義①がシネクドキーによって他のさまざまな分野における程度の低さを表し②の意味となり、これがさらにメタファーによって③の意味となる。④は①からのメタファーで、「うまい」の用法④に対応している。

「まずい」は「うまい」に見られる位相差はないが、味の悪さを端的に言う表現のため、「微妙」「いまいち」「残念」などの緩和的な表現の方が多く使われると思われる。「まずい」は基本義よりもそこから拡張した転義での使用が多い。

NLTを見ると、事態ややり方を表す語句や節と共起する例が多く、用法④の意味での使用頻度が高いことがわかる。

(30)まずい{こと(になった)/もの/状況/ところ(に)/料理}

(31){節+/動詞連用形+方/やり方/水}{は/が}まずい

多かった名詞を挙げると(カッコ内は頻度数)、「まずい+名詞」パターン(2062)では「こと(447)、もの(266)、状況(68)、ところ(64)、料理(44)」の順に多い。「…はまずい」パターン(2015)では「節+の(562)、これ(377)、それ(136)、こと(63)」の順に多い。基本義①で多かったのは「食事(17)、料理(16)」である。「…がまずい」パターン(1468)では、「節+の(129)、動詞連用形+方(61)、やり方(52)、水(47)」となる。

構文を見ると、基本義①は連体修飾でも述語でも使われるが、前者のほうが多い。NLTでは、「まずい+名詞」パターンで620例、「…は/がまずい」パターンで470例である。用法②~④でも両方の構文で使われるが述語用法が多い。

用法②も連体修飾と述部で使われるが、後者のほうが多い。高頻度の共起語は「やり方」と「対応」で、これを構文別に見ると、連体修飾で各11

例と10例、述語用法「…が/はまずい」で各60例と42例であり、他の語も述語用法が多い。

共起語は、技術を要する活動やその産出物を表すもの(運転、字、文章)よりも、特定の状況での立ち回り方(やり方、対応、説明、発言)という社会的なスキルを表すものが実際は多いようである。用法②は、対象が飲食物から活動(運転技術など)に転用されているだけでなく、状況によって判断される行為の適合性を評価する場合もある。そのため(32)のように、本来はよしとされることが状況によって「まずい」とされることもある。

(32)つまり、正しさを全面に出すのは戦略的にまずいやり方だ。(http://home-yasupapa.pya.jp/igaku%20o%20kangaeru%20no2%20kegasousyouchiryo-3.html)

もっとも、この例は対象の属性そのものを言っているのではないという点で、むしろ用法④に含めるべきかと思われるが、技術の低劣さを指す用法②の意味も持ち合わせており、②と④にまたがる用法として見ることができるだろう。

用法③では、よく例に挙げられる「まずい顔」は実際にはほとんど出てこない。これは人を侮蔑する時や笑わせる時、または「まずい顔でも」のように仮定として使うなど、使用場面が少ないからだろう。NLTでは「まずい顔」が2例、「顔がまずい」が4例見られたのみであった。「顔」に類する「スタイル」などの語も数例に留まる。

意味を見ると、連体修飾では(33)のように見映えの悪さを表すが、述部では(34)のように「よそではいいが、ここでは困る」といった状況から適合性を判断する用法④の解釈も可能となる。

(33)まずい顔に白粉をぬりたくった娘達(豊島与志雄『不肖の兄』青空文庫)

(34)白粉をぬりたくった娘たちの顔はまずい。

用法④の構文を見ると、共起語の種類が多いため、頻度が突出して高いものは(カッコ内は頻度数)、連体修飾では「こと」(419)、特に慣用的な「まずいことになった」が多く使われ、次に「状

況」(68)が挙げられる。述語では、「…がまずい」パターンで「節+の」(129)、次に「これ」(34)、「…はまずい」パターンでは「節+の」(552)、次に「これ」(377)そして「それ」(131)である。(35)まずいことになった。ふくらはぎの辺りがつって、激しく痛む。(http://ameblo.jp/eliesbook/theme-10015527807.html)

(36)何も確認せず来たのがまずかった。(http://nice.kaze.com/t-com07.html)

いずれも、事態の展開や結果が望ましくない状況であることを認識して述べた表現である。

一方、主体が失敗や失態を認めた時によく使う表現として「まずった」という語形が述部に、または一語文的に使われることがある。これは俗語で、「まずい」の動詞形「まずる」の過去形であるが、「まずる」の例は NLT にはなく、動詞形としては過去形の例のみが見られた(11 例)。

(37)カードの裏には有効期限が1年としっかり記載されている。まずった。泣きたい。おカネをどぶに捨てたようなもんだ。(http://yondance.blog25.fc2.com/blog-category-19.html)

過去形で使われる背景には、「まずかった」という過去の状態ではなく、失態をしたという行為に焦点を当て表現しようとする意図があると思われる。おそらく、似た意味をもつ「しまった」「失敗した」などからの類推が働き、語幹「まず」に「った」が加わったのではないだろうか。「まずった」と「まずかった」の違いは行為連鎖内で焦点化される局面の違いとして捉えられる。前者が失敗行為に焦点をおくのに対し、「まずかった」や「まずい」は状態に焦点をおくのである。

<行為> → <変化> → <状態>
「まずった！」 「まずかった！」「まずい！」

最後に連用形「まずく」を NLT で見ると、使用頻度が非常に少なく、主語の属性を形容詞連用形で表す「～なる／感じる／する」以外では、「作れ

る」が3例、「食べる」が2例である。森田(1989)は、「わざとまずく見せる」のように行為が意図的である場合がほとんどだとしている。次の例の「不味く」は「まずいと思いながら」と解釈できるが、「(わざわざ)まずく作って」という含みもある。(38)塩分を控えてうどんを不味く食べるより、スープを残してうどんを美味しく食べたいってところですよ。(http://blog.livedoor.jp/chibblits/archives/50883261.html)

いずれの場合も、「まずく」は技術の低さではなく味の悪さを表し、「うまく」ではなく「おいしく」と反義関係になっている。しかし、おそらく使用場面が少ないため、「おいしく」と比べて頻度は非常に低い。行為連鎖内の修飾対象は「おいしく」と同様に以下のように表せるだろう。

<行為> → <変化> → <状態>
産出を表す動詞 (産出物の状態)
飲食を表す動詞 (行為の様態)

以上のように「まずい」は、基本義より転義でよく使われ、事象を表す語と共起して「不具合、失敗」を表すことが多く、述語用法で頻度が高い。対象の属性の述べるより、特定の状況において物事を評価して述べる言い方が多い。連用修飾は基本義のみを表し、「おいしく」の反義語になる。

また、連体修飾か述語か、どの用法が高頻度かという点では以下のような傾向が見られた。

意味(共起する名詞)	連体	叙述	頻度
①基本義(もの)	++	++	
②シネクドキー(やり方)	+	++	高
③メタファー(顔)	+	++	
④メタファー(こと)	+	++	高

6. 結論にかえて

ここまで各語の多義構造とその使用状況を概観してきた。課題として、用例をより体系的に整理

した上で分析を進めていきたい。特に、連体修飾用法と述語用法の区別は機械的にできない点も考慮が必要である。例えば八亀(2008)が指摘するように、(39)の否定文では否定は「料理」ではなく「おいしい」にかかり、実質、「おいしい+名詞」は(40)の述部と同じように機能している。

(39) おいしい{料理だ／料理じゃない}。

(40) これはおいしい。

今回このような点は考慮に入れなかったが、文レベルあるいはディスコースレベルでの各語のふるまいを考察に取り入れることも重要だろう。

参考文献

- 影山太郎(2009)「序 事象の把握と言語表現」影山太郎編『形容詞・副詞の意味と構文』p.3-12
- 高崎みどり(2012)「“美味”を意味する語の使用と性差:「おいしい」を中心に」『人文科学研究』8, pp.55-68
- 西尾虎弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 武藤彩加(2002)「「おいしい」の新しい意味と用法—「うまい」「まずい」と比較して—」『日本語教育』112, pp.25-34
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行(2008)『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂出版
- 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
- Langacker, Ronald W.(1991)*Foundations of Cognitive Grammar*, vol.2, Descriptive application. Stanford: Stanford University Press